2025年度　仙台青葉学院短期大学　こども学科
学校推薦型選抜（公募推薦）入学試験問題

小論文

受験番号	氏名

次の文章を読んで、問に答えよ。

相手からのサインをキャッチする。声かけによって＜出会いの場＞を開く。ケアの要点として、その次に来るのが「相手の位置に立つ」ということである。人は相手の経験をそれとなく感じ取り、相手の位置に立とうとする性向を持っている。（中略）

ところが、他者の思いは多くの場合、謎として登場する。ケアの現場では、患者や当事者が心の底でどう感じているかは解答不可能な難問であり、だからといってこれをないがしろにしてしまうと、とたんに実践が非倫理的なものになる。「相手の位置に立つことが必要であり、かつ不可能でもある」という (1) ジレンマが、対人関係の根底にある。

（中略）

相手を想像することは難しく、常に思い込みをはらむ。でも、相手を理解することが難しいならば、相手自身に尋ねればいい。つまり、一歩踏み込んで相手の位置に立つということが、相手の声を聴くことに直結する。声かけはその出発点となる。

（中略）

大阪市西成区で「こどもの里」という施設を運営し、地域の要保護児童対策地域協議会の司会も長くつとめる荘保共子さんという人物がいる（中略）。「子どもの命をど真ん中に」と呼びかけ、行政と民間のケアラーたちに、子どもが何を望んでいるのか、子どもにとって最善の利益は何なのかと問い続ける荘保さんの一貫した姿勢は、「相手の位置に立つ」というケアの倫理における最良の実践例のひとつである。

児童相談所や自治体は、しばしば制度や業務の都合で、支援や措置の方針を決定しようとする。声を出す親の意見しか訊（き）かないことも多い。しかし、荘保さんはそのつど「ちょっと待って。それは子どもの視点に立ってますか？子どもの声を聴きましたか？」と問いなおす。子どもの視点に立ち、子どもの最善の利益を守るためには、実際に子どもの声を聴かなくてはならないという確信ゆえだろう。

（中略）

(2) このことは高齢者のケアでも当てはまる。訪問看護師の山下由香さんの語りから引用する（井部俊子、村上靖彦編『現象学でよみとく専門看護師のコンピテンシー』、八九頁）。

山下さん　〔私の研修を受けた看護師さんから〕「今訪問に行っている人、九〇過ぎでリハビリをやっているんですけど、最近〔リハビリを〕やってくれない。どうしたらいいですか」という相談があって。〔私が〕「リハビリは誰のご希望ですか？」って訊くと、「はっ！」みたいな感じになったりとかして。〔・・・〕「デイサービスに行くときにその〔玄関先の〕五段ぐらい〔の階段〕が降りてもらえないで困るっていうご家族の希望もあって」とおっしゃっていて。〔私がお伝えしたのは〕「九〇過ぎてリハビリするのは大変なこともけっこうありますよ」って、「だから本人に訊いてみたらどうですかね」というふうに言ったら〔・・・〕「そうですね。本人がどうしたいかなんて全然考えませんでした」って。「訊いてもいないし」って言ってたので。（中略）

認知症と診断された高齢者の意向はないがしろにされやすい。ここでも、相手の位置に立ってみ

ることが非常に重要である。そのためには、まずは当事者に直接訊いてみることだ。もしかするとうまくいかないかもしれないが、意思疎通を図ろうとする努力そのものがケアとなる。当事者の話に耳を傾ける行為が、相手が何を感じ、何を考えているのかを理解し、相手の位置に立つというふるまいである。

出典:村上靖彦『ケアとは何か ―看護・福祉で大事なこと』、中央公論新社、2024 年、25-29 頁、一部改変

問 1. 下線部(1)「ジレンマ」とはどのようなことで、それを解く手立てとして筆者が述べていることを 400 字以内で説明せよ。

問 2. 下線部(2)「このこと」とはどのようなことで、なぜ「高齢者のケアでも当てはまる」のか。400 字以内で説明せよ。